

「中山間過疎地域における高齢者サロン等へ大学生が 地域ボランティアとして参加することによる地域への影響と課題」

おくたのげんき隊調査研究委員会 （〇印委員長）

	氏名	所属	背景となる職種
1〇	丸岡 紀子	群馬医療福祉大学看護学部	保健師
2	島田 昇	群馬医療福祉大学看護学部	保健師
3	樋口 キエ子	群馬医療福祉大学看護学部	看護師
4	佐藤 京子	群馬医療福祉大学看護学部	保健師

I 調査研究の背景

群馬県多野地域の上野村、神流町は典型的な中山間地域で過疎化・超高齢化が深刻な状況である。この地域では地域運営組織による高齢者サロンが行われているが、高齢化と過疎化によってサロンの運営組織の人員が不足してきている。そこで、同じ多野地域にある看護系大学の大学生が年間を通じて高齢者と交流を深める事業を平成26年度より始めた。我々は、大学教育においてボランティア活動を取り入れることは教育上重要な課題と考え、中山間過疎地域における高齢者サロン等へ大学生が地域ボランティアとして参加することの教育的な意義と中山間過疎地域の地域活性に看護学生ボランティアが果たせる役割および課題を明らかにするために本調査に取り組んだ。

II 本調査地域の概況

調査対象地域は、群馬県の南西部に位置し、役場がある中心地で標高約340m、1,000m前後の山々が連なる典型的な山村である。昭和20年代に一時10,000人を超えていた人口は減少し、平成28年1月現在の人口は2,020人、今もなお、過疎化現象、少子高齢化が進んでいる。高齢化率は、57.02%と非常に高い。（神流町公式ホームページより抜粋、一部編集）

III 本調査における大学生の地域ボランティア活動

本調査対象のボランティア大学生は、「おくたのげんき隊」として、県、町、大学から任命を受けて活動を行っている。おくたのげんき隊は任命式から退任式までの1年間活動する。平成26年4月より始まり、現在まで3期のおくたのげんき隊が結成された。

26年度の活動は、2年次看護学生34名により行われた。活動期間は平成26年4月～平成27年3月、1年間で合計14回の高齢者サロン等へ参加し世代間交流を図り、全体での報告会を2回開催した。今回の調査対象は、27年度、28年度の活動である。27年度の活

動は4年次保健師課程履修看護学生20名により行われた。活動期間は平成27年4月～平成28年1月、活動回数は、社会福祉協議会（以下、社協とする）の事業を2地区で11回、地域包括支援センター介護予防事業15回、町保健事業（各種検診）5回の合計43回、12月に活動報告会を行い退任された。平成28年度の活動は、3年次及び4年次保健師課程履修看護学生合計39名により行われ、活動期間は平成28年5月～平成29年2月（予定）、活動回数は、社協事業2地区10回、地域包括支援センター介護予防事業34回、町保健事業（各種検診）5回の合計49回であった。（平成29年1月現在）2月に活動報告会を実施して退任される。

地域包括支援センターの事業では、ミニデイ、脳トレ教室、運動教室、栄養教室の補助及び、手遊びやゲームなど学生企画のレクリエーションを実践した。社協の事業では、高齢者サロンの会場づくり、食事づくり、サロン参加者との交流、レクリエーションの企画・実践を行った。また、敬老の日に民生委員とともに、独居高齢者宅を巡回し表敬訪問をしたり、地区で行われている高齢者スポーツへの参加もあった。町保健事業では特定健康診査、後期高齢者健康診査、がん検診、歯周疾患検診、肝炎ウイルス検査の会場において、問診票の事前チェック、会場案内などを行った。

IV 倫理的配慮

本研究は研究筆頭者所属大学研究倫理委員会の承認（承認番号15A-15平成27年10月29日取得）を得て、書面及び口頭で研究の趣旨、方法を説明し、同意が得られた対象者から同意書を得て実施した。

V 質問紙調査

1. 調査期間・対象

- 1) 1回目調査：平成28年2月22日、平成27年度おくたのげんき隊（看護学生20名）
- 2) 2回目調査：平成28年12月13～16日、平成28年度おくたのげんき隊（看護学生39名）

2. 調査方法

自記式質問調査用紙を用いて、本ボランティア参加に対する意識を調査した。

3. 調査結果

1) 質問紙調査結果

1回目調査では、対象者20名中19名（回収率95%）、2回目調査では、対象者39名中39名（回収率100%）の回答が得られた。参加学生の満足度を表1に示した。

平成27年度、28年度ともにおくたのげんき隊に参加した学生の満足度は高かった。

【表1 参加学生の満足度】 学生が自分に求められていたと感じたことは、「レ

	とても良かった	まあまあよかった	あまりよくなかった	まったくよくなかった	N
1) おくたのげんき隊に参加して良かったですか。	27年度 12 63%	7 37%	0 0%	0 0%	19 39
	28年度 30 77%	9 23%	0 0%	0 0%	
	とても楽しかった	まあまあ楽しかった	あまり楽しくなかった	まったく楽しくなかった	N
3) 高齢者との交流は楽しかったですか。	27年度 16 84%	3 16%	0 0%	0 0%	19 39
	28年度 30 77%	9 23%	0 0%	0 0%	
	とても役に立つ	まあまあ役に立つ	あまり役に立たない	全く役に立たない	N
2) おくたのげんき隊の活動は、今後のご自身のキャリアに役に立ちますか。	27年度 7 37%	11 58%	1 5%	0 0%	19 39
	28年度 23 59%	15 38%	1 3%	0 0%	
	とても役に立つ	まあまあ役に立つ	あまり役に立たない	全く役に立たない	N
4) 高齢者との交流は、今後のご自身のキャリアに役に立ちますか。	27年度 12 63%	6 32%	1 5%	0 0%	19 39
	28年度 28 72%	11 28%	0 0%	0 0%	
	とてもイメージでき た	まあまあイメージ できた	あまりイメージでき なかつた	全くイメージできな かつた	N
5) 神流町に行ったことで地域(コミュニティ)をイメージすることができましたか。	27年度 8 42%	10 53%	1 5%	0 0%	19 39
	28年度 12 31%	27 69%	0 0%	0 0%	

クリエーションを提供する」が一番多く、次に、「高齢者の話を傾聴する」が多かった。学生たちは、レクリエーションを手掛かりとした交流活動をする中で、傾聴が重要であると感じていた。また、その次には「一緒に食事をする」、「学生自身のことを話す」ことであり、町の高齢者が興味を持って学生に接してくださり、一方的に話をする側と聞く側になっていたのではなく、互いに会話のやりとりがあったと思われる。

自由記述から、おくたのげんき隊の活動を通して過疎地域について考えたことについて 89 記録単位の記述が得られた。学生らは、過疎地域を訪れる事で、交通事情や病院や商店の少なさから生活のしづらさをリアルに感じたが、コミュニティの絆が強く、住民は工夫をしながら生活しており、地域の強みがあることに気づいた。高齢者との世代間交流を通して学生が感じたことについては、107 記録単位の記述が得られた。多くの学生は高齢者との関わりが少なく、活動前は、「高齢者とは病弱、虚弱な人」というイメージを持っていた。しかし、地域で生活する高齢者は、元気で明るく知恵に満ち、パワフルであり、学生達が元気をもらったり、癒されたりして、これまでもっていた高齢者のイメージが大きく変化した。世代間交流は高齢者にとっての意義だけでなく、自分たちにとっても意義深かったと捉えていた。自分が神流町に貢献できることは何かについて 96 記録単位の記述が得られた。自分たちの専門分野である健康に関する情報やレクリエーションの提供、コミュニケーション技術を生かした交流を通して町の高齢者に刺激と元気を与えること、町の現状や魅力を知らない若者や大勢の人々に知ってもらうよう情報発信することなどがあげられた。

V インタビュー調査

1. 調査期間及び対象

1) 1 回目調査：平成 28 年 4 月 23 日、神流町職員 3 名

2) 2回目調査：平成28年7月26日、サロン担い手（ボランティア）6名

2. 調査・分析方法

グループでの半構成的面接。インタビュー会話を録音したものを逐語録としてデータを記述した。逐語録のデータを内容分析の手法で分析した。

3. 結果

1) 町職員へのインタビュー

高齢者は学生との触れ合いを喜び、活動を楽しみにしていることから、学生の参加は事業に高齢者を継続的に参加させる誘導因子になると捉えていた。しかし、町の活性化にはまだ至っていない。活動の課題としては、対象者のニーズを学生へ十分情報提供できなかったことによりニーズと学生の提供するレクリエーション活動のミスマッチがおきることがあったことがあげられた。また、学生への支援として学業とボランティア活動のバランスが取れるようスケジュール調整をすることがあげられた。

2) サロン担い手（ボランティア）へのインタビュー

ボランティア受け入れ側の住民としての意見が聞かれた。職員のインタビューと同様、関わる高齢者は学生が来ると喜び、明るくなる、学生が来て困ったことについては「ない」とのことであった。学生の印象としては「かわいい」「素直」「神流町のことをみんなに伝えたいという気持ちを感じる」など肯定的な印象であった。町の活性化については、サロンは活性化されたが町は変わっていないとのことであった。学生に期待することは、「いるだけでいい」、今後の活動に対しては、「活動の継続」「一人の学生が継続的にかかわる」「他の地区への活動の拡大」「使命感ではなく一緒に楽しんでもらいたい」などがあげられた。

VI 考察

活動の教育的意義

大学におけるボランティア活動は、単に奉仕活動としてではなく、学習効果をもたらすことが複数の先行研究により明らかになっている¹⁾。学生は、現地を訪れ、住民との交流を通して神流町の魅力、住民同士のつながりの強さ、高齢者は元気で明るく知恵がある尊敬の対象であると認識が変化し、現地に行って交流することの重要性を学んでいた。このことは、今後、学生が医療従事者となった時に、住み慣れた地域で住み続けたい人々の思いを理解し、それを実現するための保健・医療・福祉活動への原動力になると考える。

また、この活動で学生はボランティアの提供者としてかかわったが、逆に高齢者からパワーや自己肯定感、楽しさ、幸福感、高齢者の知恵を与えられ、学生と高齢者の間に互恵的な関係が見られた。また、人と人の繋がり大切さを感じており、ソーシャルキャピタルと健康について考える機会となった。学生自身の課題としては、これまでの看護学実習

では獲得することが少なかった企画力、プレゼンテーション力を挙げる学生が多かった。

学生たちが町に貢献できることとして、情報発信と高齢者に刺激を与える存在となれると考えていた。過疎地域の現状を知り、地域や活動に対して愛着を抱いたことが伺えた。

この活動は、地域社会に目を向けて地域の課題を考える能力を育成し、地域包括ケアシステムを実践して活躍できる人材の育成に役立つ教育的意義があると考ええる。

中山間過疎地域の地域活性に看護学生ボランティアが果たせる役割および課題

活動が行われた地区の高齢者には喜んでもらえたが、活動が限られた地区のサロンや介護予防活動であったため、地域全体の明らかな変化は見られなかった。しかし、受け入れ側の住民からは今後も活動継続や一緒に楽しむことを望まれている。3年間で活動は少しずつ拡大、安定化してきた。おくたのげんき隊は任期1年の活動である。これをきっかけに過疎地域の地域活性化に関心を持つ学生もいる。今後は学生から多くの若者や他の地域の人々へ情報発信をして協力者を増やすことで多様な形で地域活性化が進行することが期待できる。今後もこの活動を継続することで、地域活性化の効果は表れてくると思われる。

活動の課題としては、学生の力量形成と力量不足を補うための教員と町職員の支援（情報提供、担当者との調整、スケジュール調整、現場での活動支援など）が考えられる。

【参考文献】

- 1) 時任隼平、橋本孝夫、小田隆治、杉原真晃：過疎地域におけるサービス・ラーニング受け入れに関する研究，日本教育工学会論文誌，39(2)，pp83－95，2015.